

天てん駆くせよ法ほっ勝しょう寺じ

八島游眩

作者プロフィール

「Final Anchors」で第五回日経星新一賞グランプリ、「蓮食い人」で同優秀賞をダブル受賞。UWC 英国校（国際バカロレア）、筑波大学を経てシカゴ大学修士。アートナビゲーター。 <https://>

[/YashimaYugen.com](https://YashimaYugen.com) で作品と創作方法論を公開。Twitter: [@YashimaYugen](https://twitter.com/YashimaYugen)

佛に三種有り。

嘗て佛だったもの、

既に佛であるもの、

これから佛に成るものの何れかなり。

『れいけんしょうにん靈賢上人言行録』より

1 法勝寺発進

ついに法勝寺が天駆する。

その知らせを聞いた善男善女は、閻浮提——教化しえぬ衆生が呼ぶところの地球——の全土で歓喜の声を上げた。

奈良の北西に位置する京阪奈は今や佛都として名高い。その京阪奈からほど近い丘陵に囲まれた宇宙基地・応華山は、世界人口の三割、三十億の佛徒の注目を一身に集めていた。この地に建立された法勝寺の祈念炉が、四百六十日の祈祷の果てに臨界に達し、第一宇宙速度に必要な推力が得られたのである。

整地された平原にそびえ立つ巨大な九重塔が、五月の強まりつつある陽光を浴びていた。かつて、ある寺のことを「時間の海を渡ってきた美しい船」と表現した作家がいた。この壮麗な九重塔も、また眼を惹きつけて放さない。

だが、この法勝寺は比喻ではなく、まさしく時空を渡る巨大な船——星寺である。

法勝寺は、六勝寺と呼ばれる六山の筆頭である。六勝寺のうち、延勝寺、円勝寺、成勝寺は、彼方の他星にすでに天駆し、法勝寺はそれに続く。

本来、五重塔や九重塔などの佛塔は、佛舍利——釈迦の遺骨を納め祀る一建造物である。

しかし、飛塔は、本尊のおわす金堂をはじめ、修行の場と居住空間を内包する伽藍、すなわち寺のほぼすべての建造物を塔内部に納める。

先端まで含めた飛塔の全高は、百十丈（三百三十メートル）にも及ぶ。

九つの各層の断面は八角形。層ごとに展開された黒い屋帆は、天へと上る巨大な階梯となり、白い壁と対照的である。地上から見上げると、力強い垂木や太い柱などの部材は朱に塗ら

れ、全体では赤さが際立つ。建造に使用されているのは圧縮鍛造された強化木材・甲木であり、その強度は鋼鉄を遙かにしのぐ。

飛塔の先頭にある装飾、相輪は全高の五分の一にも及ぶ。その造形は、古典的な空想科学物語の映像に登場する、環を連ねたアンテナそのものである。

相輪の最先端には、佛舍利である佛牙——釈迦の歯を納めた球形容器の宝珠がある。この宝珠が中有に「切れめ」を入れることにより、時空跳躍を可能にする。佛理学によると、中有は空でありながら実体を持つ特殊な時空間である。暗黒物質との関係を示唆する説もあるが定説ではない。宝珠の下に同じく球形の竜車、装飾の水煙が続き、その下に連なる九つの円環である宝輪は、まばゆい金色に輝いている。

佛理学。それは、万物を構成する佛質と佛精を相互転換する手法を研究する学術分野である。佛の教えの七割は佛理学として理論化され再構築された。涅槃経に一切衆生悉有佛性と説く。佛理学では、この概念を拡張し、衆生のみならずあらゆる佛質に佛性があり、佛精と等価であることが宇宙の根本原理であるとする。

本来、蓄積に四万六千日かかる祈念量は、佛理学の成果である交響摩尼車群の高速読経により百分の一に圧縮された。この年月、三千大千世界の数百万の善男善女が、法勝寺を訪れて百十四言語での読経に参加し、祈念炉に祈りを捧げてきた。六勝寺のうち、閻浮提に残っている尊勝寺と最勝寺も遠隔感応で合力供養している。供養で捧げられた無数の香・華・燈明は、衆生の祈りの篤さの証である。

発進供養は今や頂点に達していた。祈念炉は透明な強化セラミックで作られた巨大な球体で、法勝寺の底部にある。読経とそれに込められた祈念は、効率よく祈念炉に封じ込まれ、内部で反射と圧縮を繰り返す。それがまばゆい光と轟音となって外に溢れ、地面を揺るがしてい

る。

飛塔は、その上部、第八層から地面にまで斜めに伸びた、八本の太い不空羅索で蓮の花をかたどった蓮台——発射台に固定されている。祈念炉に集約され増幅された力に拮抗できるのは、佛理的に不壊の鎖のみである。だが大地の割け目さえつなぎ止められようという逞しい鉄鎖でさえ、強大な推力に抗して張り詰め、今にも引きちぎられんばかりであった。

鎖を張り詰めた弦、大地を剛弓とすれば、今まさに放たれんとする太い矢のようでもあった。ただしこの矢は引き絞った弦を越えて、弓とは反対側に飛ぼうとしている。

管制堂から少し離れた屋外集会場では、飛塔を背景に、出発前の記者会見が行われ、それに続いて管長である巖真が法話を始めようとしていた。

講堂では予定を大幅に超えた千五百人の客を収容できず、会場は屋外に変更された。中継映像を見ようとする人が、場外にも雲霞のごとく集っていた。

仮設の壇上には、宇宙僧の一同が起立して並んでいる。その一人、照海は三十五歳。新華嚴宗を奉じながらも密教と顕教の双方を修めた秀才で、華嚴大学での応用佛理学の研究や指導を担う学僧である。今回の天駆では、航宙を担当する。

佛理学の奥義を極めたる者は、三種の技を為す。すなわち操佛、装佛、創佛である。操佛は供養により諸佛の力を借り、装佛は佛をまもってその力を借りる。創佛は佛を勧請してその佛の力を借りる。照海はこれらの三種佛技すべてに通曉した稀有の学僧として名を轟かせていた。他の僧も、それぞれ専門分野を持ち、その分野では一流として知られた逸材が選抜されている。

供物として捧げられた香は、会見会場に立ちこめ、手で触れられそうなほどの息苦しい密度であった。照海らのまとう墨染めの法衣も、祈念が発する熱波にはためいているようであっ

た。法衣は、動きやすいように紐で肘や膝下を縛っている。

机の上にずらりと並ぶ話筒を前に、巖真は、よく響く深い声で各国の記者たちに語りかけた。居並ぶ黒衣の中で唯一、紫の法衣をまとった五十代半ばの真言宗の僧の言葉には、並々ならぬ権威と自信がにじみ出ている。それは、医僧であることも関係しているだろう。

「我ら七名の宇宙僧が目指すのは、持双星の紫釈院におわす大佛である。持双星に佛法が伝わって千六百年。開帳されるのは百八十年ぶりとなる。佛記は、その佛が一目拝するだけで極楽浄土に至る無上の美しさであると伝えている。むろん、いま生ある者でその御姿を拝したことがある者はいない。開帳の期間が短かったことに加えて、写真はもちろん絵姿を残すことも一切禁じられていたので、どのような御姿であったかは想像するしかない。だが、我らはその貴重な開帳に立ち会う栄誉をいただいた」

巖真の声は、これから大事業を行う者の確信に満ちていた。一種のカリスマともいえる。

「かつては法隆寺や唐招提寺のように、寺こそが国際交流の場所であり、新しい技術を研究する時代の最先端であった。またかつては鑑真や玄奘のように、僧こそが荒ぶる海や果てしない砂漠を渡る冒険者であった。そのような時代ははるか過去のものか？ 否。今や佛法の光は、星辰の彼方まで三千大千世界を隈なく照らしておる。本計画は多くの善男善女の支持と喜捨を受け、莫大な金額が投じられている。とはいえ、佛教界内外に本計画に異を唱える方々もいることは承知している。現にこの会見会場内にもおられよう」

巖真の眼光が鋭くなった。

「しかし、我らの参拝は、閻浮提と持双星の双方にとって重要な意味を持つ。そのために我らは長年の修行を重ねてきた。宇宙僧が肉体と精神を制御し、宇宙での過酷な活動に能く耐えることは知っておられよう」

巖真の言葉は誇張ではないことを照海は身をもって知っていた。

僧としての修行とは別に、宇宙僧として四年続いた厳しい修行の日々が思い出される。百七十種の供養で使う、五百種に及ぶ様々な宝具の取り扱いの修練。

一週間にわたる断食と不眠不休の座禅。

八時間連続の読経。

大峯千日回峰行には及ばぬとしても、百日に及ぶ深山での生存を賭けた行。

このときはあまりの辛さに疲労困憊して、長年の夢を断念しかけた。

深い瞑想と呼吸法を鍛錬することにより、宇宙僧は、冷凍睡眠などに頼らずとも、深い

禅定、三昧の境地に入れば新陳代謝を平均で二十八パーセントまで落とすことができる。大僧

正ともなれば十六パーセント、新華厳宗の中興の祖である靈賢大僧正に至っては七パーセントを達成したという。

とはいえ、今回はその必要はない。最先端の佛理技術に基づく星寺の行程は、ここ閻浮提から三・六九e＋一三由旬（三十九光年）離れた持双星まで二か月かからない。中有を渡る天駆は、いかに遠距離であっても四十九日のうちに終わる。

「中有の天駆は、死出の旅であり再生の旅である。命がけの旅であってこそ、旅路の果てに佛にまみえることもできる。この天駆で、佛の智慧と慈愛が三千大千世界に満ち満ちていることを、我らが再び示そう。未来は佛とともにあり。合掌」

厳真の法話は、招待客のみならずその電視中継に見いる全世界の善男善女を魅了した。七名の宇宙僧たちは、蓮台に向かって徒歩で移動した。合掌・読経しつつ歩みを進め、舷梯を上り、飛塔初層にある観音開きの扉に一人ずつ入っていく。

しんがりの照海が、ひとり遅れて、飛塔を見上げ、今一度見惚れていると、

「照海どの。そろそろ方丈へお上りください」

しびれを切らした係僧に声を掛けられた。

飛塔の重力制御は、静止・天駆の状態にかかわらず常に重力佛によって行われ、天駆中も直立時と同じ方向に重力がかかる。飛塔中心にある心柱しんぼしらの周囲は、各層を移動するための無重力回廊となっている。照海は、回廊を通り最上部に向かった。方丈の手前で巖真と鉢合わせした。

「照海、遅いぞ」巖真がじろりと睨んだ。

照海は赤面して詫びた。

巖真の後ろに隠れるように十三、四歳ほどの女の子がいた。

「その子は？」

一見、日本人と見えた。

「サルジェだ」

「ではその子が素佛の……」

「さよう。宗雲山そううんざんに上ってからゆっくり紹介する。今は発進準備を進めるぞ」

大佛参拜に加えて、法勝寺は今一つの使命を担っていた。転生佛候補てんせいぶつこうほ、すなわち素佛であるサルジェを紫釈院に送り届けることである。ただ、このことは記者会見でもなぜか触れられていなかった。

いずれ分かることだろう。照海は、目の前の大任に意識を集中することにした。

飛塔最上部の第九層、すなわち先端部が、司令部ともいうべき方丈である。三人は薄暗い部屋に入った。控えめではあるが集中力を高める効果のある香が焚かれていた。

電力供給を行うための駆動読経はすでに始まっている。

方丈は、一丈（三メートル）四方の部屋という名前の由来に反して球形である。球の直径は二丈で、球面内壁に沿って八方に一つずつ座面がある。飛塔全体を貫く心柱はこの球の中心も通っている。微かに白く発光して、僧の緊張した面持ちを照らし出していた。

僧たちは、底面にある環状の操作卓を八方から囲むように蓮華座を組んで座っており、各種機器の最終確認を進めていた。

訓練で何度となく目にした光景だが、照海は常ならぬ高揚感を覚えた。

巖真は一段高い管長の座に着き、照海は自分の座面に着席した。サルジェもその隣に座った。

慧眼、エマヌエルらと視線を交わす。彼らとは、宗派も国籍も違えども、半年の修行を共に経た、命を預け合う仲間だ。訓練を繰り返してきた発進手順は、阿吽の呼吸で進んでいく。

エマヌエルは、ベトナム出身の父とフランス出身の母を持ち、黒に近い栗色の髪を御河童にしている。動禅宗の尼僧で、通信および探測系を担当する。緊張のためか、かすかに頬を上気させている。

慧眼はエマヌエルと同門の機械僧で、機関と各種装備の操作を担当する。中性的な印象を与える外見からは人間と区別が付かないが、整った顔がわずかに人工的なものを感じさせる。

「佛質転換率九十五パーセント。祈念炉出力九十七パーセント」慧眼が操作盤を見て報告する。

続いて、地上と交信していたエマヌエルが報告した。

「管制堂より報告。地上側も最終点検を完了とのことです」

巖真は頷き、告げた。

「全層の屋帆を縮退」

「全層の屋帆を縮退します」照海が復唱し、屋帆を操作する。最上部から傘をすぼめるように各層の屋帆が順次閉じてゆき、飛塔は細長い一個の円錐に近い形となった。

「耐重力姿勢に移行」

「耐重力姿勢に移行します」慧眼の言葉に応じて、八つの座面がスライドしつつ九十度回転し

た。全員が背を地面に向ける体勢になる。

心柱を中心に、宇宙僧の上半体が菊の花のように広がった。全員、足は蓮華座を組んだままである。

「佛質転換率百二パーセント。祈念炉出力百五パーセント」慧眼が報告する。

「管長。発進準備完了です」航宙責任者たる照海が告げる。

「抜錨せよ」

「抜錨します」

巖真の命に照海は応えた。

飛塔を大地に固定していた八本の縛鎖の先端にある錨が、一斉に蓮台から排出され、飛塔上部に巻き取られ始めた。

続けて、巖真の声が一段と高く響く。

「法勝寺、発進。合掌！」

「合掌！」

すべての僧が唱和し、合掌した。僧たちが合わせた手を包み込むように、半透明の宝珠が出現し、桃色の淡い佛光を放った。

この瞬間を、三千大千世界の善男善女もまた電視機を通じて見守り、合掌した。

飛塔は巨大な佛の手に引きずり上げられるように緩慢に蓮台から浮上した。

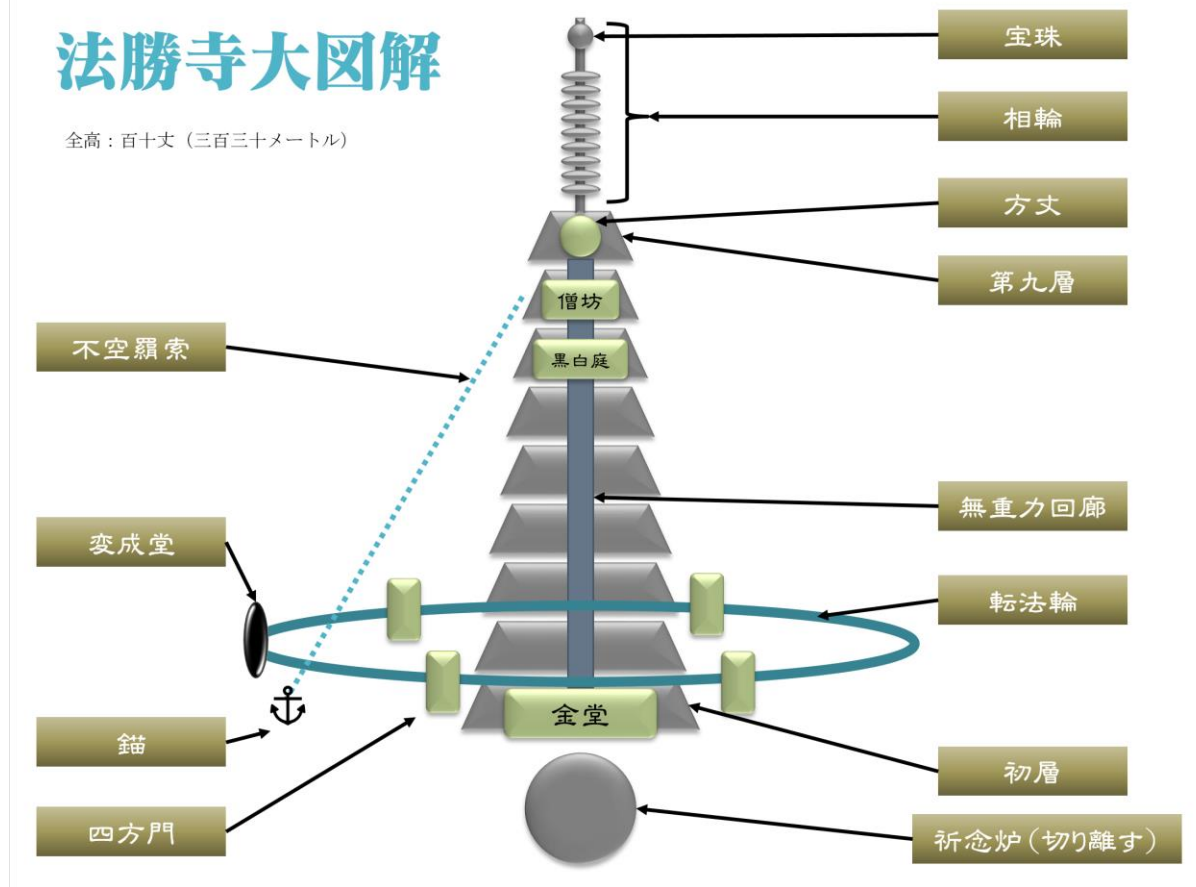
そして、バランスを保ったまま速やかに加速し、上昇していった。

地上からは、佛質から転換された純粋な佛精が太陽の如きまばゆい光となって、飛塔の下部から吹き出しているのが見えたであろう。

（お楽しみいただけましたでしょうか。お試し版はここまでです。本作は2018年6月に

法勝寺大図解

全高：百十丈（三百三十メートル）



されます。また電子書籍としても発売されます。ご購入は[こちらから](#)。
()

東京創元社から刊行予定の『プロジェクト…シャーロック年刊日本SF傑作選』に収録